昭和41年度名古屋大学大学院教育学研究科修士論文概要

社会規範と家族の成員との関係について

—社会的性格の心理学的アプローチを中心として—

生　源　寺　靖　浩

日常生活において，われわれの周囲には，いろいろな形での「不幸」を感じている人々，又その「不幸」の実感さえ麻痺し，空洞化してしまっている人々があまりにも多いように思われる。わたくしは，それら「不幸」の諸形態を手掛りにして現代の社会病理学的な現象の一端を考察したいと考える。

先ず，現代に普遍的な問題状況としての「疎外」と「不幸」とは次元を異にするものであって，疎外そのものは人間の意識をこえた状況であると規定したい。

ところで，今日では人間疎外を経済的側面でみるだけではなくして，人間の社会生活全体にみとめる考え方が有力となってきている。たしかに人間疎外の問題は，経済構造のみならず，現代機械文明の発展と無関係には語りえない。E・フロムによれば「今や時代は，生産の問題は一応解決し，社会生活の組織化の問題が人類の最大の課題であるという段階に達している。人間は厖大な機械的エネルギーを利用することに成功したので，生きるための物質的諸条件を生産するために，人間のエネルギーのすべてを労働に注ぎこむという課題からは解放された」ということである。

フロムに従って，疎外の概念を規定すれば次のようになるであろう。人間が自らを外在化し対象化することである，と。つまり人間が自らを異った存在として経験するその経験のしかたであって，人間自身がつくりだしたものが自らをはなれて対象化し，逆に人間を支配し，非人間化せしめる現象を意味する。このように，人間をパースナリティとして心理学的に把握し，そして社会的性格論を展開しているが，このことからもうかがえるように，人間性に固有の欲求の型通りには形成されなかった社会的性格類型が，フロムの考える疎外論の中核であるといえよう。ここでとりあげた疎外は「不幸」のさまざまな形の背後に横たわる一つの抽象的概念であり，人間が，人間としての本質から疎外されている生き方の状態という自己疎外が中心的な内容であるように思われる。

ところで，不幸＝疎外という図式が成り立たないとすれば，「不幸」とはどういうことをいうのであろうか。それは，人間が疎外された状況で，不安であったり，不満であったり，あるいは孤独であったり，倦怠感を抱いたりしており，こういったものを「不幸」の諸形態とよびたい。すなわち，これらは疎外そのものではなくて，疎外の主観的な帰結なのである。この小論では，フロムの疎外概念を軸とし，そこから生活空間における不幸の諸形態との関係をみることにした。その際，ごく少例ではあるが，事例が考察されたが，それらの事例は，いわゆる実例ではない。しかしわれわれが一般に広い意味の生活空間の中で経験する不幸の公分母となりうるように配慮された事例を記述した。

このようにみてくると，人間疎外と不幸についての問題は，社会的背景を考えずして考察することは意味がないと思われる。そして社会的背景という場合，まず「現代社会」そのものの特徴を問題としなければならなであろう。その特徴を端的に表現しており，しかも最もポピュラー化しているものに「マス・ソサエティー」がある。この言葉の持つ内容は，現代社会の技術の発達による人間の非人間化を第一にあげなければならないであろう。このときの技術とは，機械技術にとどまらず，マス・プロダクションやマス・コミュニケーションなど社会技術をも意味する。清水幾太郎氏の分析に従えば，マス・ソサエティーの特徴は三つの側面にわけられる。(1)分化…無数のさまざまな集団のコンプレックス，(2)拡大…その集団のコンプレックスの巨大化，環境の間接化，(3)集団の機械化…現代の多くの集団は機械に似た合理性と超個人性を含んでいる。そしてこれら三つの側面は，相互に関連している。マス・ソサエティーの一貫して観られる道程は，合理性追求への一直線の道であるといえよう。ところが「マス・ソサエティー」であらわされる現代社会の現実的様相は「分化」ではなくて「分裂」であり，「拡大」は多数の人間との相互理解を可能にし，人間を合理的な存在たらしめるはずが，いろいろな角度からみて，人間を非合理的存在としてしまうように思われる。間接的環境と諸個人をつなぐものは，実物のニュー

スではなく，ほとんどが独占的大企業によるマス・コミュニケーションの一方的にコピーされたニュースであり，コピーが人為を加えられるという点でも実物の高度の抽象の産物である。それから又大企業と離れがたく結びついている政府による宣伝がある。

集団の機械化における現実的側面は，原理的には，ビューロクラシーによって合理的構造を与えられていることは否めないにしても，必然的に少数者の自由な決定にますます大きな役割があたえられるという現代のパラドックスがある。そしてほとんどの人間にとって，かれの人間の全体性にとって無意味をものはビューロクラシーにとって，唯一の有意味なものとなる。そこで人々はビューローから分離された家族のうちで自己の全体性の回復を求めざるをえないであろう。ビューローにおいて抑圧してきたパースナルな，エモーショナルな行動と反応をとりかわしうるのは，家族という集団においてである。ところが，マス・コミュニケーションによって，又家族という集団にたいする相対的に過大な期待によって，彼はインパーソナルな世界へつれだされてしまう。

さて，次に社会的背景での人間の，より心理的側面をとりあげなければならないが，ここでは，社会現象と個人の心的ダイナミックスの関連をみるために，社会的性格がとりあげられる。フロムによれば，社会的性格とは「同一の文化に属する大多数の成員によって分有された性格構造の中核であり，人間の欲求が一定の社会経済構造に適応していくうちにつくられる。同一の状況の集団の成員に共通する性格」である。そして先にも触れたように，人間性に根ざした仕方では形成されなかった社会的性格の諸類型は，本質的に疎外のモメントを含んでいると考えられる。社会的性格については，さらに次のことが言いうる。㈠社会的性格は社会構造にたいして人間性がダイナミックに適応していく結果生ずる。㈡社会的条件が変化すると，社会的性格が変化し，新しい欲求と願望が生ずる。㈢この新しい欲求が新しい思想を生み，人間はその思想（イデオロギー）を受けいれやすいようになる。㈣これらの思想が新しい社会的性格を固定化し，強化し，人間の行動を規定する。

現代人の疎外を説明するフロムの図式は，社会経済的条件，社会的性格，イデオロギー的要因，及び人間の本性の四つのからみ合いであらわされるが，そこで現代人に特有の社会的性格の類型は「逃避の類型」と「非生産的類型」にわけてのべられる。ここでは，それぞれについての類型のカテゴリーのみをあげておく。「逃避の類型」は(1)権威主義的性格(2)破壊性(3)機械的画一性，である。中でも特に機械的画一性のメカニズムは，現代における一般的傾向である。「この特殊なメカニズムは，現代社会において，大部分の正常な人々のとっている解決方法である。…かれは文化的な鋳型によってあたえられるパースナリティーを，完全に受けいれる。」

「非生産的類型」には(1)受容的構え(2)搾取的構え(3)貯蓄的構え(4)市場的構えの四つが考えられるが，中でも市場的構えは，現代においてのみ有力に発展してきている。人間は自己自身を需要に応じられるようにする。自分は売り手であると同時に商品である。

要するに，社会的性格は，個人の生活条件から発する内在的欲求と社会の要求する条件との妥協の中で形成されるとみられる。

次に少し座標軸を転換させて，生活空間における不幸はどのような様相を呈しているかをさぐるための道具的図式の考察がなされた。生活空間というのは，主体―環境の枠組であって，行動が主体的条件と環境的条件に相互依存する全体的事態によって決定される。ただ〝生活空間〟を考えるときは，個々の行為に焦点をおくものではなく，主体的要因と環境的要因の総体を重視することになる。そこで，個人は自己自身の領域と外界との関係における自己の領域とをもっている。前者を主体的セルフ，後者を外界的セルフと名づける。両者間のバランスに関して相対的な関係を四つ考えることができる。

① 主体的なセルフ志向の傾向が大で，外界的セルフ志向の傾向も大きい個人。
② 主体的セルフ志向の傾向が大で，外界的セルフ志向の傾向が小さい個人。
③ 主体的セルフ志向の傾向が小で，外界的セルフ志向の大きい個人。
④ 主体的セルフ志向の傾向が小で，外界的セルフ志向の小さい個人。

又，このような人々の生活空間における疎外の条件を四つ設定する。①財に関するもの。②役割に関するもの③結合に関するもの。④規範に関するもの，である。

こうして四つの疎外の条件と，それぞれに両セルフ志向の四つの組合せとをさらに組合せて，現代の人間の，より具体的な不幸の型態を16のセルに分類することが可能となるであろうが，これは，さらに多面的な検討を加えて精度を増さねばならないであろう。